

樽前山

○北東山麓における1997-2007年の比高変化

2007年9月に、国土地理院、気象庁と共同して北東登山道に沿った水準路線(図1)の3度目となる測量を実施した。

BM4560を基準にした各期間ごとの比高変化をみると(図2)、1997-2001年の期間ではTR1230からBM10506にかけての若干の山上がり、TR1040からTR1090付近を中心とした隆起が特徴である。一方、2001-2007年では全体的に沈降し、BM10501からBM10506にかけて明瞭な山下がりを示す。

ところで、支笏噴出物の分布域にあるTR1160からBM4560の間の比高変化パターンは両期間で類似する。また1997-2001の期間で隆起中心となったTR1040からTR1090付近は、鮮新世の火山岩からなるモラップ山麓とそれに連なる支笏カルデラ縁にあり、ここが隆起したというよりも、むしろ、この両側が沈降しているのかもしれない。

ここで、TR1090を不動点とすると、1997-2001年の期間も若干の山下がり傾向となり、全期間を通して山体の沈降・収縮となる。いずれにしても2001年以降、樽前山は山体沈降の傾向にあり、これは前報告したGPS観測結果と矛盾しない。

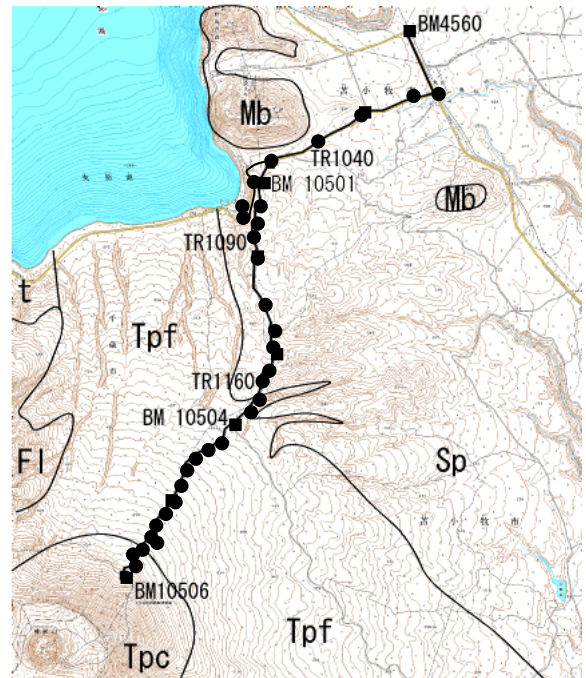


図1. 北東登山道沿いの水準路線と地質分布。黒丸は1997年に北大によって取り付けられた水準点、黒四角は2001年に設置された水準点。地質分布は20万分の1地質図「札幌」(石田ほか、1980)による。Tpc:樽前山山体軽石丘、Tpf:樽前山軽石流堆積物、FI:風不死溶岩、Sp:支笏噴出物、Mb:紋別岳及び多峰山溶岩。

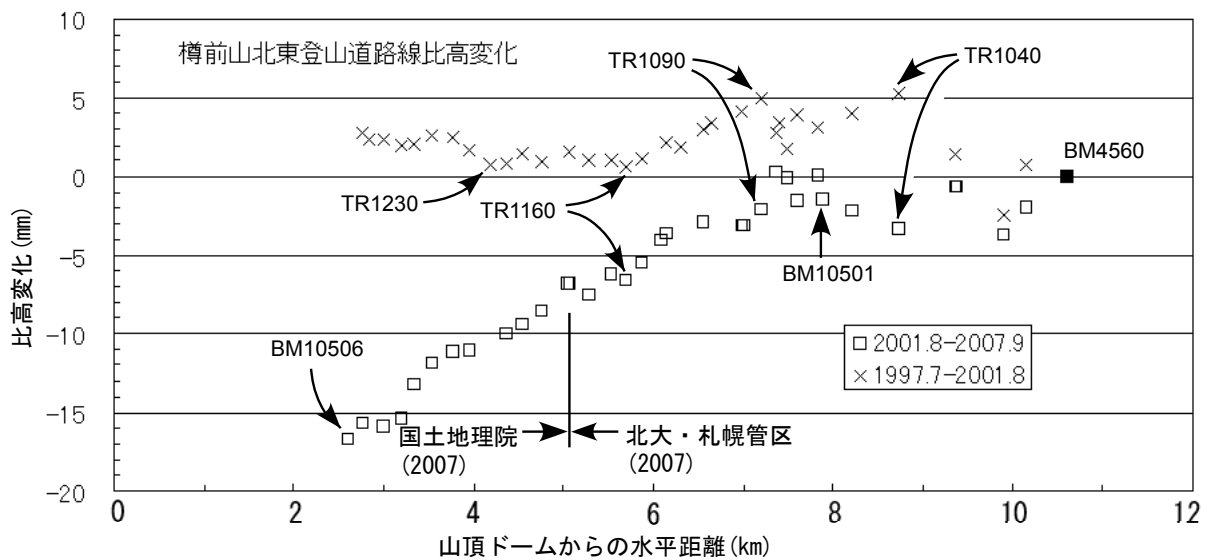


図2. 北東登山道に沿う水準路線の比高変化 (BM4560基準)。
1997年7月: 北大・名大, 2001年: 国土地理院, 2007年9月: 北大・札幌管区气象台・国土地理院